

令和３年度 第２回柏市教育福祉会館運営協議会 会議録

議題１：ラコルタ柏の一体的利用について

No.	発言者	発言趣旨	事務局からの回答
1	金子委員	大変有効に思う。一般の利用者にとって一体的利用は当然のことに見えると思う。	
2	根本委員	現時点においては、特段の意見なし。４月から実際に運用を始め、利用者から色々な意見や要望等が出てくるかと思うが、その要望にどう対応するかということが重要になろうかと考える。	利用者からの意見や要望等について、「利用者の声」やイベント等を通じても拾っていきたい。また、その内容については、生涯学習部及び保健福祉部の事務局で検討し真摯に対応していく。
3	林委員	「誰もが集える みんながつながる」というラコルタ柏全体のテーマを実現するうえで中央公民館と総合福祉センターの登録団体が全館を通じて一体的利用ができることは欠かせない。現在、公民館を利用する人が自然に１階、２階を訪れるのはラコルタフェスティバルのような特別な機会に限られ、事業による棲み分けが市民の交流を阻害している面があると思う。来年度からボーダレスに利用ができるようになれば、人の流れが生じ同じフロアで両者が会合う機会が増える。場所を共有することで自然に交流ができ、相互に参加できるプログラムも増える。イベント時だけでなくいつも身近にいるという感覚が相互理解には大事だと思う。登録団体要件の統一化必要だが、団体の規模や利用頻度などで偏らないように運用してほしい。	団体登録の要件（優先予約（２か月前からの予約））については、令和４年４月より統一化した。利用者（団体）にとって、利便性が高く、かつ、館の目的に沿った活動が可能となるよう、今後の運用についても適宜見直す。
4	北村委員	ラコルタ柏の一体的な活用については、それぞれの施設の一層の有効活用が期待されるとともに、中央公民館利用団体と総合福祉センター利用団体が同じフロアで活動することで、新たな交流が生じることも期待される。イベントや事業に加えて、通常の活動の中で、一体的な運用が図られることによる教育福祉の連携に期待している	

議題２：活動の振り返りについて

No.	発言者	発言趣旨	事務局からの回答
1	一ノ瀬委員	「誰もが集える みんながつながる 地域へ広がる」のコンセプトどおり、様々な催しがあつてとても良いと思った。まだまだ新しいこと、つながることの催しを開催して欲しい。講座が１回で終わらず、フォローアップから団体登録までにつながったというのがとても素晴らしいと思った。	今後も単独での講座やイベントで終結することなく、次の活動へとつながるよう組み立てを行う。
2	金子委員	年齢も活動も利用者の幅が広がったようでよかったと思う。今後の情報発信については、種々の方法を望む。特に高齢者は、紙ベースの情報が欲しいようである。また、館内で乳幼児を連れのかたを見かけることが多くなったと感じる。飲食しながらくつろいでいるかたの姿も見られる。多くの利用者があるとよいだろう。	情報発信については、「誰に」「どのような」情報を伝えたいのか、目的を明確にする必要があると考える。ご指摘の通り、館に訪れてほしい対象者が「高齢者」「若年層」などによって伝える手段が変わってくるため、SNS・紙・HP等の手段を検討し充足できるように取り組む。
3	根本委員	わかりやすい資料の作成をありがとうございます。本議題の資料における分析結果（活動の成果等）を踏まえ、令和４年度においてどう実施していくかということが重要になると思う。また、令和３年度において、コロナ禍でも種々の事業が実施でき、「誰もが集える みんながつながる 地域へ広がる」の中でも「誰もが集える」という部分はかなり進展してきているものと考えられる。「みんながつながる」という部分は、高校生のボランティア参加という施策がとても評価できるものであると思う。 また、コロナ禍であったが、フェスティバルの開催は「みんながつながる」という面でのとても良いきっかけになったものと思う。実行委員のみなさま、お疲れさまでした。	
4	林委員	いろいろな対象者に向けての活動や講座が始まっていて今後が楽しみである。団体の利用だけでなく、高齢者であっても、障害があっても、子ども連れでも、個人が気楽に参加できるプログラムやしかけを増やして欲しい。登録団体中心だと個人が参加しにくい。	施設利用の多くは団体中心であるため、多世代交流スペースの空間を有効活用し、個人の方がイベントの観覧から参加、参加から活動につながる雰囲気とプログラムを提供したいと思う。
5	北村委員	新型コロナウイルス感染症の拡大が長期化する中、感染防止に留意しつつ、新たなイベントや市民からの活動発信など、創意工夫がほどこされた様々な活動を展開したうえ、市民主役の館の運営についてもスタートを切ることができたが、これまでの「教育福祉会館」の利用から「ラコルタ柏」への転換として、大きな一歩であったものと思う。	

議題３：今後の進め方について

No.	発言者	発言趣旨	事務局からの回答
1	一ノ瀬委員	様々な世代向けの講座があり、とても魅力的である。これからも継続していただきたいと思う。障がいのある中高生向けの講座があると嬉しい。興味を持つきっかけづくりの講座がたくさんあるといいと思った。	複数の障害関係団体からの連携提案により、障害のある子もない子も参加ができるスポーツ、工作、ダンス教室、クイズラリー、映画鑑賞、クリスマス会などのイベントを開催し、交流を図った。今後も様々な提案を実施し、参加機会を創出していきたい。
2	根本委員	本議題の資料の「令和４年度の方角性」にあるとおり、令和４年度は「みんながつながる 地域へ広がる」という部分の「つながり」と「広がり」を意識することが重要と考える。「つながり」については、フェスティバルの継続・子ども人形劇の開催・その他利用団体間の交流施策等が重要になるものとする。 また、高校生ボランティアを発展させ、中学生や親子で参加できるようなボランティアもあり得ると思ひ、そのためにはボランティア参加証明書の発行も有効な施策と思ふ。さらに、先日「みんなで飾ろう節分飾り」に参加したが、コロナ禍で人が集まらず実現はできなかったものの、参加者による共同作業ということもつながることの有効な施策と思ふ。 「広がり」については、令和５年度に向けた取組みでも良いと思ふが、講座等を受講された方がどう地域で活動されたか等の検証も見据えることが重要と考える。あまり負担にならないような範囲内ではと思ふが、SNS等で取組み内容等の情報を発信するという方法もあり得ると思ふ。。SNSを活用した情報発信につきましては、ある程度形は整ってきているものとする。地道に継続していくことも重要であると思ふ。	【社協】親子スペースやテーブルゲームのサポートボランティア講座を機に、館内での定期的な活動につながっている。また、イベントの参加を機に、事業の企画提案やボランティア登録・活動をされる方もいる。引き続き、次につながる企画や関わりを意識していきたいと思ふ。 【中公】令和３年度中央公民館講座における、「みんながつながる 地域へ広がる」を意識した取り組みとして、以下の①～④を実施した。 ①自主活動支援講座「仲間が集う動画編集の勉強会」：成人教育事業《コミュニティづくり講座》「動画編集入門講座」の受講者のうち、動画編集について更に学習したい有志の方が参加。講座において、作成および編集した動画を「わくわく人形劇まつり」当日に放映する学習成果の発表にまで至った受講者や、自主活動グループを結成し、中央公民館利用登録団体となった受講者がいた。 ②自主活動支援講座「館内装飾ビジュアルセミナー」：福祉政策課、社会福祉協議会との共催事業として実施。昨年９月より、毎月行事に合わせたテーマで開催し、成果品をラコルタ柏の館内装飾として、展示している。なお、地域の方がボランティアで、絵本の読み聞かせや作品作りのお手伝いに参加して下さり、参加者同士のコミュニケーションの繋ぎ役を担っている。 ③自主活動支援講座「地域情報発信の勉強会」：高齢者教育事業《生涯いきいきセミナー》「地域の魅力を探り伝えよう」からの流れを引き継ぎ、自主活動支援講座として、地域情報交換のための座談会と散策マップの製図、並びにコメント記入に取り組んでいる。３月以降は、受講者による地域情報発信の自主活動プロジェクトチームとして活動していく予定。５月末を目標に、心温まるオリジナル「散策マップ」を完成させ、図書館等での公開展示を目指している。 ④地域課題講座「植えて育てて花いっぱいマイガーデン」：酒井根地域ふるさと協議会からの相談により、酒井根近隣センター花壇の環境整備を兼ねて、来館者や通学児童にとって、地域の居場所としての心む場所を作ること、地域の人々が花壇で土づくりや花の育て方を学びながら、生涯学習や地域活動に携わっていくことを目的とし、園芸講座で学びながら、活動の人材を育てていく形で企画、実施したもの。３月以降は、実際の花壇整備における、より具体的な取り組みに向けて、フォローアップ講座（全２回）を予定している。（主催：酒井根地域故郷協議会、協力：地域支援課、酒井根近隣センター、中央公民館、柏市社会福祉協議会） 今後も新しい取り組みの実施により、または現在進行形の取り組みに対する支援（フォローアップ）により、拡充していく。 さらに、活動状況の把握、検証を改善につなげていく。 また、様々な取り組みにおいて、より多世代交流を図るため、ボランティアを募る仕組みづくりも検討していく。 【コーディネーター】子育て中の母親を対象に保育付きで「ママの自分時間カフェ 何でも話そう今の私・これからの私」を、３月に実施した。日々子育てに忙しく、またコロナ禍で人とつながることが難しい状況下、母親たちが落ち着いて自分を見つめ語り合える場を提供することで、今後の自身のあり方への気づきを得、カフェ実施後は積極的に社会参加する動きが見られる。具体的には、多世代交流スペースでの講座への参加、連携事業の提案（予定）など。
3	林委員	「利用者間」とは個人と個人、個人と団体、団体と団体の出会いを意味し、「事業間」とは館として提供する講座やイベントの相互作用や協働を意味するのか。登録団体が増えて活躍することも大事だが、議題１、２で述べたように、個々の市民がつながりやすくするための仕組みやしかけが必要だと思う。 ３階はほとんどの利用者が通る場所で、きれいだがやや親しみにかける。コロナ禍なので賑わいが無いのは仕方ないが、いろいろな人が足を止めたり、立ち話をしている姿などがみられると雰囲気は温くなる。ホール中央もしくはモニター付近であえるテラスの展示の一部を置いて関心を引き１階に誘導する（義足を一つ置くだけでインパクトがある）などの工夫が欲しい。エントランスのアプローチで物品、食品の販売ができると活気がでそう。多世代交流スペースのようなオープンな空間では、そっと見守ることもあれば、知らない人同士が声をかけあうこともできる、ぶらっと立ち寄ったときに何かできることがあってまた来たいと思ふような場づくりが可能ではないか。	・「利用者間」「事業間」は委員のご説明のとおり。登録団体における活動だけでなく、個人の活動や個人から団体へとつながる活動も推進していきたい。今年度では、個人の方からの自発的な企画提案事業やイベントにたまたま参加、来館していた方などを通じて紹介していただいた個人や団体から提案いただいた事業（イベント）を実施。市民の身近な居場所であり、様々な地域活動を支援できる施設になるよう取り組む。 ・ラコルタ全館における季節ごとの装飾をイベント仕立てにして実施するなど、来館者に館に親しみを持ってもらえるよう講座を検討。３階のエントランス装飾については、１階のポスター掲示なども含めて、館の誘導につながるよう工夫したい。なお、利益を目的とした物販が困難であるため、現在では１階のあえるテラスにおいて、青和園（知的障害者施設）の職業訓練一環の代行販売を実施。このような館の目的に応じた代行販売等は、今後も広く検討し新たな賑わいとなるよう調査研究していく。
1	北村委員	資料に掲載された方向性は非常に重要なものであり、この方向性に沿った事業やラコルタ柏の運営について、引き続き、ご尽力をお願いいたします。 特に、公民館の目的（役割）については、社会教育法に掲げられているとおり、「住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的」とされており、まさに、教育と福祉を包有する、ラコルタ柏が目指している役割が期待されている。 また、公民館活動については、公民館という建物の運営だけにとらわることなく、公民館活動を行う市民が主役となって活動することがより重要であることから、引き続き、「柏の人財」が集うラコルタ柏における、人のつながりづくり、人の育成、人の発見・発掘の取組について、よろしくお願ひいたします。	市民が運営の主体になり、市民による自立的な地域活動が可能な館を目指し、生涯学習部と保健福祉部が連携しながら取り組みを進めている。発展途上ではあるが、１年が経ち、「教育」や「福祉」の部局間２制度を、利用者の目線に合わせ一体化に取り組んでいる。引き続き、教育と福祉一体化を図り館の利便性を向上することで、市民の学びや活動を支援し、地域の課題解決に取り組む施設となるよう取り組む。

その他

No.	発言者	発言趣旨	市からの回答
1	一ノ瀬委員	様々なことに取り組んでいるラコルタ柏のこれからが、とても楽しみである。	
2	根本委員	協議会や委員会の開催日のたびに、1階から入館し、5階まで歩いているが、以前と比べとても親しみやすい装飾がされており、親子連れの方も増えているように感じるため、「誰もが集える」施設に近づいているものと思う。 市民参加型の装飾もとても良い取組みであると思う。	
3	林委員	予約受付について次の点を検討してほしい。現在ラコルタ柏は3階以上も2階も部屋の予約は2か月前からとなっている。イベントやセミナーを行う場合、このタイミングでは講師やゲストのスケジュール調整ができず、チラシの配架や広報に載せて周知、集客することも難しい。抽選や回数限定などで数を絞ってもいいのももう少し早く（4～6か月前）予約が取れるようにできないか	貸し部屋の予約受付開始時期を早める点については、利用者のニーズ、部屋の特性、部屋の稼働率、使用料金、直前のキャンセルに対する対応、近隣の同様の施設における状況などを踏まえ、総合的な判断に基づいて検討していく。
4	牧野委員	個人的には、教育福祉会館という名称からイメージされる「教育と福祉」を、教育と福祉がごちゃ混ぜになる、シームレスになっていくというイメージへと転換できるような事業展開ができるとよいと受け止めています。とくに教育も福祉も、教える側-教えられる側、ケアする側-ケアされる側という非対称になりがちなので、「学び」というイメージや、「自治」（言葉としては堅くなってしまうですが、自分たちでやる、依存ではなくて、みんながお互いに配慮し合って、みんなでやる）というイメージ、さらに「共生」も「共に生きる」から「生きるを共にする」というイメージへと転換できるような議論や事業になるとよいと考えています。 その意味では、資料3・資料4で、団体に所属しない一般市民の利用のあり方やとくに福祉系の人たちの活動などについて、もう少し知りたいと思いました。	これまでのコミュニティの時代から、個人を尊重する時代の転換にある。これからの社会は、多様な価値観を有する方が存在し、生き方や考え方が多岐に渡ります。それぞれが違う思考を有しながら、ひとつの大きな社会に存在して共に生きていく（一緒に生きていく）、そしてすべての人が主役（当事者）となるような社会が作られていくことが地域共生社会の目指す姿だと考える。個人個人が自立しつつ、互いが支えあっている社会を地域で一緒に作れるよう、館での講座や事業の組み立てや、活動の推進ができるよう企画提案をより一層進めていく。